

山田清市標

左國信

*子規・虚子

初版第1刷 1976年6月20日

著者 大岡 信

装幀 著者

発行者 大久保憲一

発行所 株式会社花神社

東京都千代田区猿樂町2-2-5

興新ビル605 電話291・6569

印刷所 工友会印刷所十コーエー

製本所 今泉誠文社

用紙布 文化エージェント十金池

1976年 © Printed in Japan
0095-760104-1092

子規・虚子 * 目次

I—病牀子規

子規文章讚 9

日本人の美と自然 16

鶏頭の十四五本も 23

神様が草花を染める時 32

子規と露伴の首都展望 48

II—虚子の句

1 碧梧桐と虚子 57

2 漱石と虚子の「俳体詩」 67

- 3 虚子の「連句論」 75
- 4 貫く棒の如きもの 83
- 5 「存問」のころ 91
- 6 「おどろいて」の一語 99
- 7 「づんぶりと」の一語 105
- 8 微小なるものへの凝視 113
- 9 胡瓜の曲り具合 122
- 10 疑問形で終る句について 128
- 11 疑問形で終る句の特質 141
- 12 虚子の疑問形は乾坤をとらえる 149
- 13 「何色と問ふ黄と答ふ」の不思議 156

14 老年の艶
164

15 勤勉と若さ
173

16 虚子の絶吟
179

あとがき
192

初出一覧
196

子規・虚子

I — 病牀子規

子規文章讚

子規の文章を読み出すと途中でやめられない。『松蘿玉液』『墨汁一滴』『病牀六尺』『仰臥漫録』のような随筆も、『俳諧大要』『俳句問答』『癩祭書屋俳話』『随問随答』あるいは『歌よみに与ふる書』のような俳論、歌論も、読む者を巻きこまずにはおかない活気と熱情をもっていて、しかもそれらの活気、熱情が、嘆賞すべきねばり強さをもった観察力と批判力という形であらわれるために、読者は一旦読みはじめたらやめられない精神的昂揚を身うちに感じるものらしい。

『仰臥漫録』は、『墨汁一滴』『病牀六尺』と時期的に重なる最晩年の日録だが、その

内容はとても「漫録」などというものではない。

「繃帯取換ノ際左腸骨辺ノ痛ミ堪ヘ難ク号泣又号泣困難ヲ窮ム」

「此日始メテ腹部ノ穴ヲ見テ驚ク 穴トイフハ小サキ穴ト思ヒシニガランド也 心持悪クナリテ泣ク」

「始終ドコトナク苦シク、泣ク」

こういう記事が随所にある日録だから、その痛み苦しみは、この種の苦痛を知らぬ人間にも乗り移って、戦慄をおぼえさせずにはおかない。

「五日ハ衰弱ヲ覚エシガ午後フト精神激昂夜ニ入りテ俄ニ烈シク乱叫乱罵スル程ニ頭イヨク苦シク狂セントシテ狂スル能ハズ独リモガキテ益苦シム（略）朝雨戸ヲアケシムルヨリ又激昂ス 叫ビモガキ泣キイヨク異状ヲ呈ス」

というような記事のある明治三十四年十月の、十三日という日には、子規は母と妹の留守の間に、目の前の机の上におかれた小刀と千枚通しの錐きりで、自殺を図ろうとさえする。

「……此鈍刀ヤ錐デハマサカニ死ネヌ 次ノ間ヘ行ケバ剃刀ガアルコトハ分ツテ居ルソノ剃刀サヘアレバ咽喉ヲ搔ク位ハワケハナイガ悲シイコトニハ今ハ匍匐はらばフコトモ出来ヌ 已ムナクンバ此小刀デモノド笛ヲ切断出来ヌコトハアルマイ 錐デ心臓ニ穴ヲアケテモ死ヌルニ違ヒナイガ長ク苦シンデハ困ルカラ穴ヲ三ツカ四ツカアケタラ直ニ死ヌルデアラウカト色々ニ考ヘテ見ルガ実ハ恐ロシサガ勝ツノデソレト決心スルコトモ出来ヌ 死ハ恐ロシクハナイノデアアルガ苦ガ恐ロシイノダ 病苦デサヘ堪ヘキレヌニ此上死ニソコナフテハト思フノガ恐ロシイ……」

このときも子規は、死のうか死ぬまいかで逆上し、「シヤクリアゲテ泣キ出シタ」。
しかし、子規の驚嘆すべき強さは、ただにこの種の阿鼻叫喚の苦しみを克明に記録してゆくところのみあるのではない。今引いた十月十三日の記事に続いて、十五日には一種の遺言めいた文章が書かれているが、そこには「自然石の石碑はいやな事に候……柩の前にて空涙は無用に候 談笑平生の如くあるべく候」などの言葉と並んで、次のような堂々たる感想が記されている。

「兆民居士の一年有半といふ書物世に出候よし新聞の評にて材料も大方分り申候 居士は咽喉に穴一ツあき候由吾等は腹背中脛しりともいはず蜂の巢の如く穴あき申候 一年有半の期限も大概是似より候ことと存候 乍しかしながら併居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけ吾等に劣り可申候 理が分ればあきらめつき可申美が分れば楽み出来可申候 杏を買ふて来て細君と共に食ふは楽みに相違なけれどもどこかに一点の理がひそみ居候 焼くが如き昼の暑さ去りて夕顔の花の白きに夕風そよぐ処何の理窟か候べき」

『一年有半』については十日ほど後、本の読後感でさらに痛烈な批評を加えているが、いずれにせよ、子規がここで「美」に対するこれほどにも深い信頼と、そして自信を書きしめていることは注目に値する。死に臨む人間に対して、「理」はついに何ほどのこともなしえない、「美」のみが究極の救済でありうる、と子規は断じているように見える。そこには、明治二十八年の作である『俳諧大要』の中で

「極美の文学を作りていまだ足れりとすべからず、極美の文学を作るますます多から

んことを欲す」

と書いた子規がいる。

子規は年久しい叫喚、逆上の病苦の中で、ついに宗教とは無縁であった。かれは苦しみをまぎらすものを求める。書画はもちろん、玩具、蓄音器、果物、菓子、食事、追憶、弟子たちの来訪、そして、いうまでもなく、書くこと、自分の書いたものを翌日の新聞紙上で読むこと。それらの努力は、結局のところ、「美」を感じ、「美」を定着することによって日毎の生命の充実感を必死にわがものとしようとした努力にほかならないと思われる。

子規は審美学や哲学をいたるところで嘲笑しているが、それは裏返していえば、自己の全感官を通じて本然的に獲得されてゆく美というものへの、かれの不拔の信頼があつたればこそであろう。『俳句問答』『随問随答』などを読むと、激しい実戦の間に感覚と理論をとき澄ましてきた人の、簡潔で鋭い太刀さばきに、思わず拍手したくなるような個所が随所にある。そういうことを思い合わせながら、『仰臥漫録』などを読

むと、これほどの生の悲慘が、これほどの生の充溢と結びついている言語道断さに、目を見張るほかない。

山口誓子氏の『子規諸文』の中に「愉快でたまらぬ」という一文がある。氏は極度の苦痛にうめき絶叫し号泣しつづけた子規が、同時に、始終「愉快でたまらぬ」と書きつづけたことに注目し、晩年の子規を知る上で「かなり大切」なことだといっているが、たしかにこの《快活さ》に子規という文人の一大特徴がある。

「明治三十三年十月十五日記事」という子規の小品文は、この日一日の自分の生活を逐一詳細に記したみごとに文章だが、驚いたことにかれば、ほとんど身動きもできぬ体でありながら、「ホトトギス」募集の週間日記の応募作の選をし、添削し、かつ清書までしている。「面白い」という文字がしきりに現われる。病苦にさからって筆をとり、書いてゆくうちに、ぐんぐんその事の中に没頭してゆき、昂揚し、愉快を感じ、生命の延長を感じとってゆくかれの心の動きが、じかに伝わってくる。実際、かれの最晩年の文章はすべてそういうふうにできている。